農 業 技 術 情 報

2020年6月3日
ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
ＪＡ幕別町	0155-54-4118
ＪＡさつない	56-2131
ＪＡ帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町６月１日）
（ ）内は平年値（※春小麦は暫定）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早１	草丈 68.0(59.2)cm　茎数 1,226(875) 本/㎡ 上位茎数　896 本/㎡	止葉期　5/25 (5/26) 出穂始　6/　(6/3) 出穂期　6/　(6/7)
春まき小麦	遅１	草丈 45.1(※41.1)cm　葉数 5.9(※6.4)枚 茎数 1,287(※1,028)本/㎡	幼穂形成期　5/23 (※5/22)
馬鈴しょ	±０	茎長 3.4(4.3)cm　茎数 2.5(2.8)本/株	萌芽期 5/25 (5/25)
大　豆	早３	は種期 5/15(5/18)　は種終 5/21(5/23)	出芽始 5/25(5/28) 出芽期 5/27(5/30)
小　豆	遅１	は種始 5/15(5/16) は種期 5/23(5/21) は種終 6/1 (5/24)	出芽始 6/2(6/1) 出芽期 6/　(6/4)
菜　豆	―	は種始 5/25(5/27)　は種期 5/30 (6/2)	
てん菜（移植）	±０	草丈 13.3(14.6)cm 葉数 11.4(11.0)枚	
てん菜(直播)	遅５	草丈 5.5(5.9)cm　葉数 2.9(3.9)枚	
牧　草	早３	草丈 71.0(64.9)cm	
飼料用とうもろこし	早２	草丈　14.4(12.2)cm　出葉数 3.9(3.5)枚 は種期 5/11(5/13)　は種終 5/21 (5/22)	出芽期 5/22(5/24)
ながいも(マルチ)	―	植付始 5/13(5/15) 植付期 5/18(5/22) 植付終 5/30 (5/30)	
たまねぎ	早１	草丈 19.6(19.6)cm 生葉数 3.4(3.2)枚 葉鞘径 6.9(5.1)mm	

畑　作

＜麦類＞

「きたほなみ」の止葉期は平年と比べ１日早くなっています。出穂以降の最も重要な管理は赤かび病防除です。防除適期を逃さないよう、ほ場観察に努め計画的防除を行ってください。

「きたほなみ」の茎数は平年より多く草丈は高い傾向にあり、春まき小麦は草丈・茎数ともにほぼ平年並みに生育しています。

秋まき小麦は、倒伏が懸念されるほ場では止葉期以降の追肥時期・量に注意し、使用時期がまだ間に合う場合、茎稈伸長抑制剤を使用しましょう(出穂始期まで)。春まき小麦では倒伏が懸念される場合には、必ず茎稈伸長抑制剤を使用しましょう。

１　秋まき小麦の出穂期以降の窒素追肥

現在、平年より草丈は高く、茎数は多めで推移しています。葉色もやや濃い傾向ですので、

出穂期以降に葉面散布で窒素追肥を行う場合は以下に注意して行いましょう。

（1） 尿素を使用する場合は 1.0～1.5%液を計3回散布します。

（2） 過去に高タンパクだったほ場は葉面散布を控えてください。

（3） 高温時の散布は葉やけの原因になるので避け、原則夕方の散布とします。また、尿素濃度を 1.0%程度まで下げるなどしましょう。

2 赤かび病の防除

赤かび病は開花時期に最も感染しやすく、多湿条件で多発します。1回目の適期は開花始期（図1参照）ですが、開花始に雨天の恐れがある場合は、出穂揃から防除します。出穂にばらつきが目立つ場合は、ほ場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除（開花始）を実施し、2回目以降の薬剤散布でほぼ全ての穂が薬液で保護されるように計画的な防除を実施してください。また薬剤の使用回数には十分注意してください。

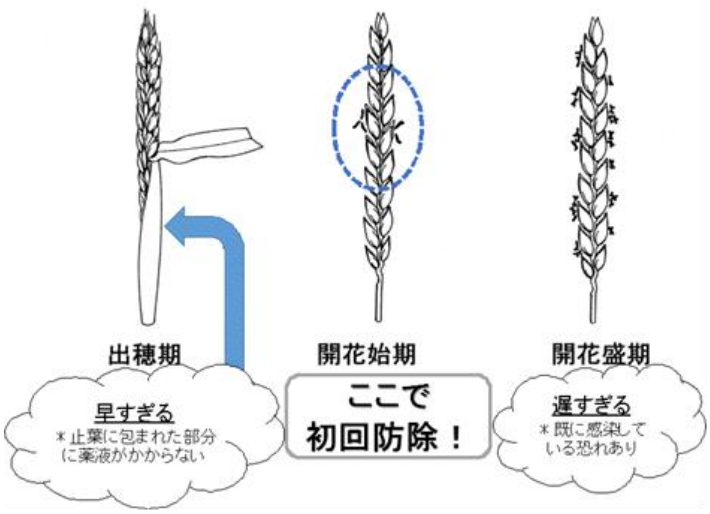


図1 赤かび病の1回目防除時期

表1 小麦赤かび病防除体系例

防除時期	農薬名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）
1回目（開花始）	バラライカ水和剤	DMI	500	収穫 14 日前まで	2回
2回目（1回目の7日後）	ベフトップジンフロアブル	ビスグアニジン MBC	800～1,000	収穫 14 日前まで	1回（出穂後）
3回目（2回目の7～10日後）	シルバキュアフロアブル	DMI	2,000	収穫7日前まで	2回
臨機（登熟期間）	チルト乳剤 25	DMI	1,000～2,000	収穫3日前まで	3回（春期以降）

※DMI剤は、他作物に薬害が生じる可能性があるので飛散に注意。

※DMI剤の連用は極力避け、使用回数も最小限とします。

※バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。

①バラライカ水和剤 → ②硝酸カルシウム （物理性の問題のため）

3 アブラムシ類の防除

ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【アブラムシ要防除水準】出穂 10 日後頃に半分以上の穂でアブラムシが観察される。

表2 アブラムシ類防除例

害虫名	農薬名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）
アブラムシ類	ゲットアウト WDG	ピレスロイド	4,000	収穫 21 日前	3回
	スミチオン乳剤	有機リン	1,000	収穫7日前	1回

※スミチオン乳剤はアワヨトウ・ムギキモグリバエに登録有り。

4　小麦「なまぐさ黒穂病」への注意

2016年に全道的に大発生し、その後の研究で道内では府県と異なる「*Tilletia controversa*（*ティレティア・コントラベルサ*）」という、低温湿潤条件で感染が助長される菌によって引き起こされることが明らかとなりました。

十勝では未発生ですが、引き続き注意が必要です。「なまぐさ黒穂病」に汚染された収穫物が乾燥調製施設に混入した場合、施設全体が汚染され出荷不能になるなど、大きな被害をもたらします。感染している場合、出穂期以降には外観から症状が確認できるようになりますので、下記を参考に、万が一疑わしい株を発見したら、JAあるいは普及センターにお知らせください。

【なまぐさ黒穂病を発症した穂の特徴】
①草丈が低くなる。また、止葉には黄化症状が見られることが多い。
②穂の外観がいびつになる。
③登熟が進むにつれ、病穂はやや暗緑色から茶褐色を帯びる。
④子実に黒～褐色の粉状物（厚膜胞子）が充満し、生臭いにおいを放つ。

※出典「ｺﾑｷﾞなまぐさ黒穂病Q&A－第２版・追補－（農政部技術普及課）」、
「北海道の小麦づくり令和３年版」（北海道農産協会）より抜粋

5　春まき小麦の追肥

現在の生育状況は平年並みです。止葉期以降の追肥可否は品種によります。

「春よ恋」：止葉期以降の追肥は遅れ穂の発生につながりやすいので注意が必要

「はるきらり」：タンパク向上のため、地力に応じ次表の追肥対応を参考とする。（中地力以上ほ場では、基本的に葉面散布のみ行い、止葉期までの生育が不足している場合のみ補助的に止葉期追肥も行う）

表３ 「はるきらり」の追肥体系例

窒素肥沃度区分	熱水抽出性窒素(mg/100g)	窒素施肥量(kgN/10a)			
		基肥	止葉期	開花期以降葉面散布	合計
低地力	０～５	１２	４	３	１９
中地力	５～１０	１２	０	４	１６
高地力	１０以上	８	０	４	１２

6　春まき小麦の倒伏対策

過繁茂等で倒伏の恐れがある場合は、茎稈伸長抑制剤を散布しましょう（薬剤例は5/18号参照）。薬害を助長する場合があるので、他剤との混用は避けてください。

7　春まき小麦赤さび病、うどんこ病の防除対策

「春よ恋」は赤さび病、うどんこ病に対する抵抗性がそれぞれ「やや強」・「強」、「はるきらり」は同じく「強」・「中」であり、臨機防除で対応します。現時点で下葉に病徴が見られるような場合は、その後の進展に注意し、止葉期に上位２葉に病斑が認められる場合は防除を実施しましょう。

表４　春まき小麦赤さび病、うどんこ病の防除薬剤例

薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
アミスター20フロアブル	QoI	2,000～3,000	収穫７日前	３回

＜てん菜＞

現在の生育は移植では平年並みですが、直播では出芽遅れにより生育不揃いがみられます。除草剤のタイミングを逃さないように注意しましょう。

５月後半に降雨が続いたため移植栽培での活着は良好です。

１ 中耕

ア 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、生育促進を図りましょう。

イ 中耕の深さは根の広がりを考慮し、次第に狭く深くなるようにして、畦間が茎葉で覆われる時期まで数回実施しましょう。

ウ 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

２ 除草剤散布

ア 除草剤散布のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、生育と雑草の発生に応じ、遅れないように注意してください。

イ 直播栽培は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

ウ 直播栽培の初回散布時期は雑草発生始～発生揃（てん菜本葉２葉期）で、は種後 30 日前後が目安になりますが、**てん菜の葉齢が進んでいない幼小個体では生育が抑制される場合があるため、注意が必要です。**

エ 直播栽培の風害対策でえん麦を混植した場合は、えん麦の**４葉期まで**に遅れないようにイネ科除草剤（ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤）による処理を行ってください。

３ アブラムシの防除

移植栽培におけるかん注処理の持続効果は 40～45 日間程度です。薬剤の持続期間を考慮し、間隔を空けすぎないように防除を実施しましょう。

表５ アブラムシの防除例

害虫名	薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
アブラムシ類	ビレスコ 顆粒水和剤	スルホキシイミン	10,000	収穫７日前	３回

４ 根腐病防除の実施

根腐病は６月中旬頃から発生します。特に連作、短期輪作、排水不良など多発が予想されるほ場は、６月上・中旬と7月中旬の２回防除を実施しましょう。特に直播栽培ではモンセレン顆粒水和剤のかん注処理を行なっていないので根腐病防除を行いましょう。

表６ 根腐病の防除薬剤例（株元散布）

薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
モンセレン顆粒水和剤	ﾌｪﾆﾙｳﾚｱ	1,000	収穫30日前	４回（育苗中含む）

＜ばれいしょ＞

植付作業は早期に終了しましたが、萌芽に時間がかかり萌芽期は平年並に迎えています。作業時期を逃さないように、ほ場を良く観察してください。

１ 中耕・培土

「カルチ」・「畦間サブソイラ」等により土壌の膨軟化と地温の上昇を図り、通気性や透水性の向上に努めましょう。

《慣行培土（中耕）の注意点》

・萌芽の直前と萌芽１週間後に行い、地温を上昇させ初期生育を揃えましょう。

・晴天の午前中に行うと効果的ですが、土壌水分が低いと培土が崩れやすく、緑化の原因になる場合があるので、適度に水分がある時期に実施しましょう。

・土壌が過湿状態の時に行うと、土を締め過ぎるので注意しましょう。

・培土作業が遅れるとストロンを損傷し、塊茎数の減少や肥大の妨げとなるため、着蕾期（平年 6/13）までに最終培土を終えましょう。

２ 除草剤

土壌散布は萌芽前までです。一年生イネ科雑草の茎葉散布については次表を参照に適切に散布してください。

表７ ばれいしょ除草剤（対象：一年生イネ科）の使用基準（例）

除草剤名	使用時期・量	回数（以内）	注意事項
ポルトフロアブル	イネ科雑草３～８葉期（収穫前日まで）200～300ml/10a	１回	イネ科雑草が完全に枯死するには５～10日を要する。
ナブ乳剤	イネ科雑草３～５葉期 150～200ml/10a イネ科雑草６～８葉期まで（スズメノカタビラ除く） 200ml/10a （収穫前日まで）	２回	効果の発現には２週間程度要する。
ワンサイドP乳剤	イネ科雑草３～８葉期まで（収穫前日まで） 75～100ml/10a	１回	イネ科雑草が完全に枯死するまで２週間程度を要する。

※上記３剤はいずれもスズメノカタビラに効果が劣る。

３ 病害虫防除

ア 疫病

平均気温 15℃以上（最適気温 18～20℃）、多湿条件で多発します。次号より掲載する疫病発生予察情報を参考に防除してください。

イ ナストビハムシ・アブラムシの防除

林地や防風林の近くで多発しやすいので注意しましょう。ナストビハムシは成虫による葉の食害だけでなく、幼虫によるイモの表面や内部に至る糸状食入痕の被害により、食用・加工用では商品化率が低下します。成虫や葉の食痕を確認したら防除を行いましょう。成虫防除は幼虫密度を低下させます。

表８ ナストビハムシを中心とした防除例

害虫名	薬剤名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）
ナストビハムシ アブラムシ類	ゲットアウトWDG	ﾋﾟﾚｽﾛｲﾄﾞ	2,000～3,000	収穫７日前	４回
	モスピランSL液剤	ﾈｵﾆｺﾁﾉｲﾄﾞ	4,000	収穫７日前	３回
	アクタラ顆粒水溶剤	ﾈｵﾆｺﾁﾉｲﾄﾞ	ﾅｽﾄﾋﾞﾊﾑｼ：2,000 ｱﾌﾞﾗﾑｼ：3,000	収穫 14 日前	３回

※ナストビハムシ成虫の発生盛期（６月上旬）に7～10 日間隔で2回実施する。

＜豆類＞

大豆のは種作業は順調に終了しましたが、小豆のは種作業は降雨によりやや遅れています。中耕により地温の上昇を図り、初期生育の促進に努めましょう。

１ 除草剤の散布

例年、散布適期を逸したり、除草剤散布後の降雨などの影響で、薬害による生育遅延が散見されます。豆類の生育や雑草の発生状況を確認し効果的な散布に心がけましょう。「パワーガイザー液剤」は有機リン系殺虫剤や他の除草剤との 10 日以内の近接散布は薬害の恐れが

あるので避けましょう。　＊薬剤使用例は 5/18 号参照

２　中耕

除草剤の残効を考慮し、地温の上昇と除草のため中耕を実施しましょう。除草のための中耕は、日中の暖かい日が効果的です。

３　大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」（ジャガイモヒゲナガアブラムシ）の防除

山間部やほ場周辺に牧草地がある場合は、被害の拡大が懸念されます。クルーザーを使用していない場合は、出芽揃から初生葉展開期に1回目の防除が必要です。その後2回目の防除を1回目の7日後頃に行いましょう。また、クルーザーを使用している場合についても、は種後1か月を目処に防除を行いましょう。　＊薬剤例は 5/18 号参照

４　金時のかさ枯病

低温・多湿条件や機械管理作業で蔓延します。予防防除としては、子葉展開期から10～15 日間隔で銅剤を2回処理します。発病株は速やかに抜き取るとともに、治療効果もある「カスミンボルドー（カッパーシン水和剤）」による防除を実施してください。

表９　かさ枯病防除例

病害名	農薬名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）
かさ枯病	ドイツボルドーDF	無機化合物	500	－	－
	コサイド 3000	無機化合物	1,000		
	カスミンボルドー（カッパーシン水和剤）	ﾍｷｿﾋﾟﾗﾉｼﾙ抗生物質・無機化合物	1,000	収穫 30 日前	3回

※「粉衣用ペアーカスミンD」と「カスミンボルドー（カッパーシン水和剤）」は合計の使用回数を3回以内とする。

野　菜

定期的な降雨と曇天により、ほ場の湿度が高い状態にあります。病気の発生に注意してください。また害虫の発生も増えています。発生が確認されたら速やかに防除を実施してください。

＜ レタス ＞

今後10日間曇雨天日が続くとされています（6/2現在）。菌核病・灰色かび病の発生しやすい環境が続くため、予防的な防除を実施してください。

（1）ナモグリバエの防除

ナモグリバエの成虫の発生、産卵が見られます。葉に白い点状の産卵痕が見られた場合は防除を実施してください。

表１　ナモグリバエの防除薬剤例

薬剤名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期	使用回数
ダントツ水溶剤	ネオニコチノイド	2,000	収穫3日前	２回以内
アファーム乳剤	マクロライド	1,000～2,000	収穫3日前	３回以内
コテツフロアブル	ピロール	2,000	収穫前日	２回以内

（2）菌核病・灰色かび病の防除

菌核病と灰色かび病は、15～20℃の多湿条件で発生が多くなります。灰色かび病は特に結球期に発生しやすいです。

表２　レタス菌核病の防除体系例

防除時期	薬剤名	使用濃度（倍）	使用時期	使用回数
定植前（かん注）	パレード２０フロアブル	100	育苗期後半～定植前日	かん注は１回（３回以内）
１回目（定植 14 日目）	ゲッター水和剤	1,500	収穫7日前	２回以内
２回目（定植 21 日目）	アミスター20 フロアブル	2,000	収穫7日前	４回以内

表３　レタス灰色かび病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度（倍）	使用時期	使用回数
ゲッター水和剤	1,500	収穫7日前	２回以内
アミスター20 フロアブル	2,000	収穫7日前	４回以内
カンタスドライフロアブル	1,000～1,500	収穫 14 日前	１回以内

（3）腐敗病の防除

腐敗病は20～25℃の多湿条件で発生が助長されます。今後の気象変動に注意してください。

表４　レタス腐敗病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度（倍）	回数(以内)	注意事項
ドイツボルドーA	500～1,000	―	・クレフノン 200 倍を加用する。 ・高温時の日中散布を避け、夕方に散布する。 降雨後の多湿条件では散布しない。

＜ キャベツ、はくさい ＞

（1）コナガの誘殺状況

コナガの成虫が５月25日～30日の５日間でキャベツほ場（相川）で97頭、はくさいほ場（五位）で39頭と昨年よりも多く誘殺されています。

（昨年度：５月21日～30日の**９日間**でキャベツほ場で14頭、はくさいほ場で4頭）

（2）害虫防除

①育苗期後半の防除

・初期発生の抑制のため、ジュリボフロアブルのかん注処理を徹底してください。

※登録内容：５月18日技術情報もしくは令和３年度農作物病害虫防除基準を参照。

②定植後の防除

・コナガが発生しています。防除を実施してください。また、キスジノミハムシも発生初期に防除を行ってください。

・コナガは薬剤抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用は避けてください。

表５ コナガの防除薬剤例（定植後）

薬剤名		系統名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
スカウトフロアブル		ピレスロイド系	1,500～3,000	収穫前日	５回以内
エスマルク DF		BT 剤	1,000～2,000	発生初期 但し収穫前日	―
スピノエース顆粒水和剤		スピノシン系	2,500～5,000	収穫3日前	３回以内
エルサン乳剤	（キャベツ）	有機リン系	1,000～1,500	収穫 14 日前	２回以内
	（はくさい）		1,000～1,500	収穫 21 日前	３回以内

（3）ジアミド系殺虫剤使用時の注意点

①連用を避け、他系統とのローテーション防除を行う(できる限り1作型に1回の使用に抑える)。

②使用後、防除効果が低いと判断された場合は、他系統薬剤による追加防除の実施を検討する。

③かん注剤、茎葉散布剤として使用する際は、所定の希釈倍率等を遵守する。

※ジアミド系薬剤については、「令和３年度農作物病害虫防除基準(P69)」を参照。

（4）軟腐病の予防防除開始

はくさい：６月中～下旬頃から予防防除開始時期です。外葉形成期から防除を開始してください。また、害虫の食痕等の傷口が侵入経路となるため、同時に害虫防除も注意が必要です。

キャベツ：結球期に発生が多くなります。結球初期から防除を開始してください。

表６ はくさい軟腐病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
スターナ水和剤	1,000	収穫7日前	３回以内	スターナ、カセット、マテリーナの使用回数は、合わせて 3 回まで。
アグリマイシン 100	1,500～3,000	収穫 14 日前	３回以内	―

（5）定植後８葉期までのべたがけ資材について（はくさい）

はくさいは３～13℃の低温に10日以上あうと花芽を形成します（夏期の抽だいの原因になります）。べたがけ資材の除去は低温の心配がなくなってから、曇天日または夕方に行ってください。

＜ だいこん ＞

（1）キスジノミハムシ防除

・は種時にフォース粒剤を使用したほ場では、は種後 20 日頃から茎葉散布を行ってください。

表７ キスジノミハムシの防除薬剤例（茎葉散布）

薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
エルサン乳剤	有機リン系	1,000～2,000	収穫 30 日前	２回以内

＜ にんじん ＞

（1）べたがけ被覆資材の除去の目安

べたがけ除去の目安は、本葉６葉期頃です。除去は、曇天日に行ってください。

＜　ながいも　＞

植え付けが終わったほ場では早期に除草剤の処理を行ってください。

（1）除草剤の処理

植え付け直後から萌芽前までに土壌処理剤を散布してください。

※薬剤については、「5月18日技術情報もしくは令和3年度農作物病害虫防除基準」を参照。

（2）マルチ栽培での芽やけ対策（スリットからの芽出し）

ほ場の見回りをこまめに行い、マルチのスリット部に芽が引っ掛かっているものは速やかに出して、芽やけ（高温障害）を防ぎましょう。

＜　ごぼう　＞

（1）除草剤処理

・ごぼうは初期生育が緩慢で、雑草害が生じやすいため、早期の雑草対策が必要です。

・アグロマックス水和剤は、発芽時の地割れが発生するまでは処理が可能です。

（2）中耕、除草

ごぼうは酸素要求量が高いため、ほ場が硬く酸素が少ないと根の生育が悪くなります。ほ場が硬くなっている場合は、除草を兼ねて中耕してください。

（3）分肥

計画的な分肥を考えている場合は、は種後 60～70 日頃（本葉 3～4 葉期）に施肥してください。

＜　たまねぎ　＞

６月１日現在の生育は、草丈19.6㎝、生葉数3. 4枚、葉鞘径６．９㎜と順調に進んでいます。また、ネギアザミウマ、白斑葉枯病の発生は平年よりやや早まると予想されています。

（1）除草剤処理の注意点

・処理にあたっては、薬害による生育阻害を起こさないよう注意が必要です。

・広葉雑草の優占ほ場：アクチノール乳剤、バサグラン液剤等

・イネ科雑草の優占ほ場：セレクト乳剤、ナブ乳剤等

・イネ科除草剤と液肥・葉面散布剤の混用は、葉と葉が接着してしまう場合があるため避けてください。

表８ たまねぎ除草剤の使用基準

薬剤名	処理方法 及び使用時期	10a 当 薬量	使用 回数	注意事項
アクチノール 乳剤	雑草茎葉散布 生育期但し収穫 30 日前まで （雑草生育初期）	30～ 50ml	２回 以内	発生後の広葉雑草に効果があるが、薬害の危険性が高い。 薬量を30～50ml程度とし、６月中旬までの涼しい時間帯の使用が望ましい。
バサグラン 液剤	移植後、6月上旬まで （雑草３～４葉期） 収穫 30 日前まで	50ml	１回 以内	発生後の広葉雑草に効果があるが、薬害の危険性が高い。 薬量を50ml程度とし、涼しい時間帯の使用が望ましい。
セレクト乳剤	雑草茎葉散布又は全面土壌散布 雑草生育期 （イネ科雑草３～５葉期） 収穫 21 日前まで	50～ 75ml	３回 以内	スズメノカタビラにも優れた効果を示す。
ナブ乳剤	雑草生育期、イネ科雑草 3～5 葉期 （収穫 14 日前まで）	150～ 200ml	２回 以内	スズメノカタビラには効果が劣る。

（2）ネギアザミウマ、ハエ類の防除

・各ほ場でネギアザミウマの成虫を確認したら、トクチオン乳剤 1,000 倍で防除を開始してください。

・ネギハモグリバエの幼虫がたまねぎのりん茎に侵入すると、品質が著しく低下します。幼虫による被害が進むと防除効果が得にくくなります。葉に縦に並んだ白い点状の成虫食痕を確認したら、直ちに防除を実施しましょう。

表９　ネギアザミウマの防除体系例

防除時期		薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
１回目	６/上	トクチオン乳剤	有機リン系	1,000	収穫7日前	４回以内
２回目	６/中	ファインセーブ フロアブル	その他 (ﾌﾛﾒﾄｷﾝ)	1,000～2,000	収穫3日前	３回以内
３回目	６/下	グレーシア乳剤	ｲｿｵｷｻｿﾞﾘﾝ系	2,000～3,000	収穫7日前	２回以内

表 10　ハエ類の防除薬剤例

薬剤名	病害虫名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
ダイアジノン乳剤40	ネギハモグリバエ	1,000～2,000	収穫 21 日前	２回以内
	タマネギバエ	700		
ベネビア OD	ハモグリバエ類	2,000	収穫 14 日前	３回以内

（3）白斑葉枯病・べと病の発生初期の防除

・白斑葉枯病は2日以上の連続した降雨、または 10mm 以上のまとまった降雨の後７日間は発生の可能性が高く、特に平均気温 18℃以上の温暖な日に初発の可能性が高くなります。

・べと病は気温が 20℃以下で、高湿度条件が続くと発生しやすくなります。蔓延が早いため、発生しやすい条件下では特に予防防除を徹底しましょう。

表１１　たまねぎ白斑葉枯病・べと病の防除体系例

防除時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
6/上	グリーンダイセンM水和剤	400～600	収穫 3 日前	５回以内
6/中	フロンサイドSC	1,000～2,000	収穫 3 日前	５回以内

（4）分肥

過度の施肥は分球や軟腐病の多発や品質低下にもつながります。

計画的な分肥（窒素量：基肥＋分施＝10kg＋５kg/10a等）を考えている場合は、移植後４週目が効果的です。（平成28年指導参考）

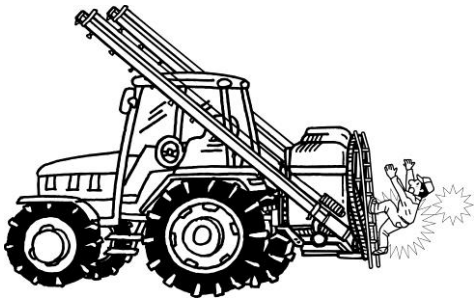
周辺作物への飛散（ドリフト）防止の徹底と農作業安全

・作物の成長も進み、農薬散布の機会が増える時期です。農薬散布に際しては風向きに注意し、周辺作物への飛散防止に努めてください。

・農薬を使用するときは、必ずラベルの安全使用基準や注意事項を確認しましょう。

・農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。

・使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。

・農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

・作業機連結時の挟まれ事故、機械昇降時の落下事故に十分注意しましょう。